





「ふう……これで48体目……ちよつと多いかな……」



今回、マーゴハンター
アイシャ・エプタが請け負った任務は

下級マーゴ討伐任務であった。

下級マーゴは群れる習性がある為、
任務中は数の多いマーゴを
かき回し、力の乏しいマーゴを
相手が倒すのを待たせ、問題なく
簡単に倒すのは実力な問題は無く、
簡単な任務といえるものだった。

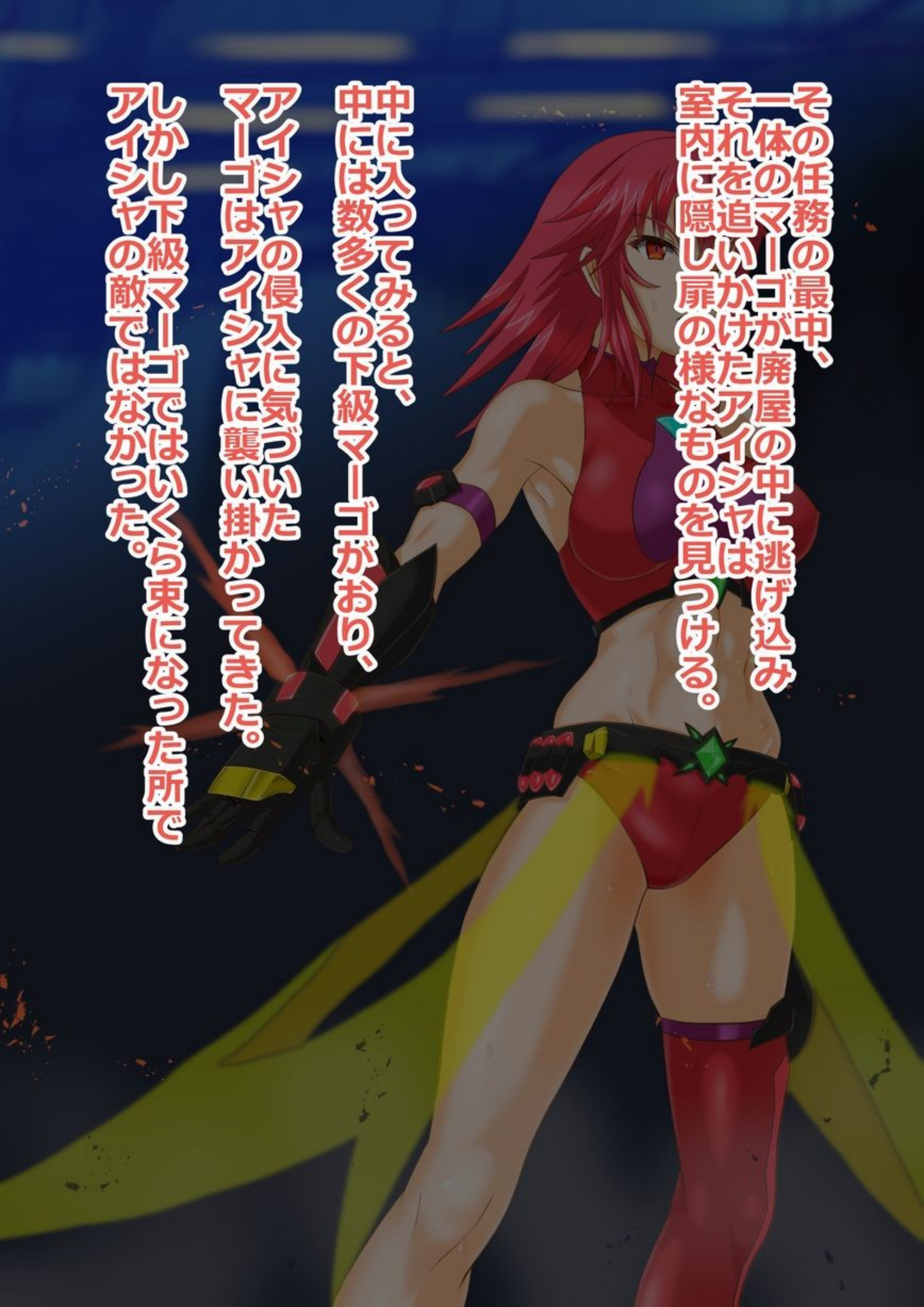


その任務の最中、
その体のマールが廃屋の中に逃げ込み
それを追いかけたアイシヤは
室内に隠し扉の様なものを見つけ
る。

中に入ってみると、
中には数多くの下級マールがおり、

アイシヤの侵入に気づいた
マールはアイシヤに襲い掛かってきた。

しかし下級マールではなかつたので
アイシヤの敵ではなかつた。



「ん〜でもこのくらいじゃあ歯ごたえ無いかな……
それより出口を見つけないと……」



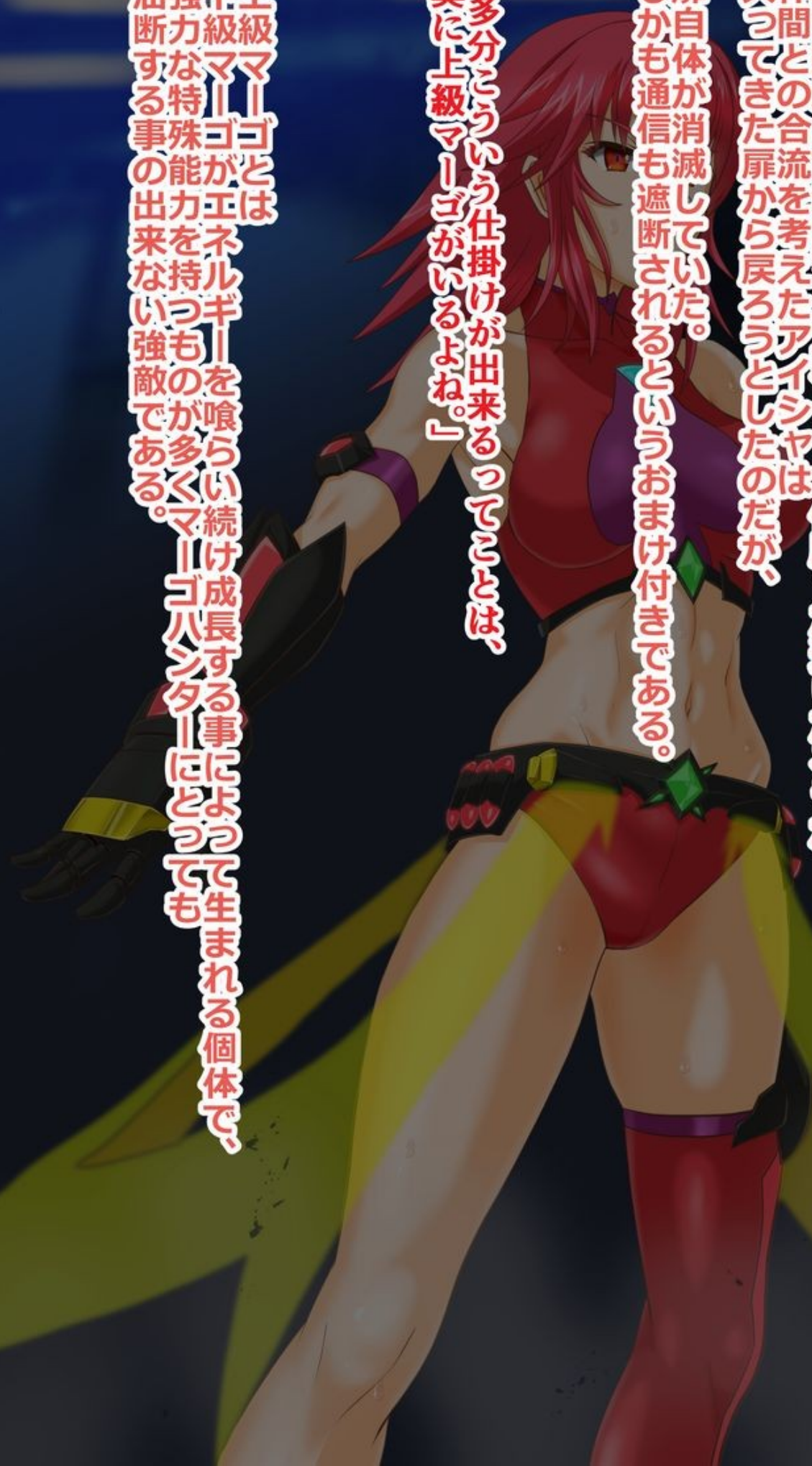
襲い掛かつてきたマールゴを5、6体屠った辺りだろうか、仲間との合流を考えたアイシヤは入ってきた扉から戻ろうとしたのだが、

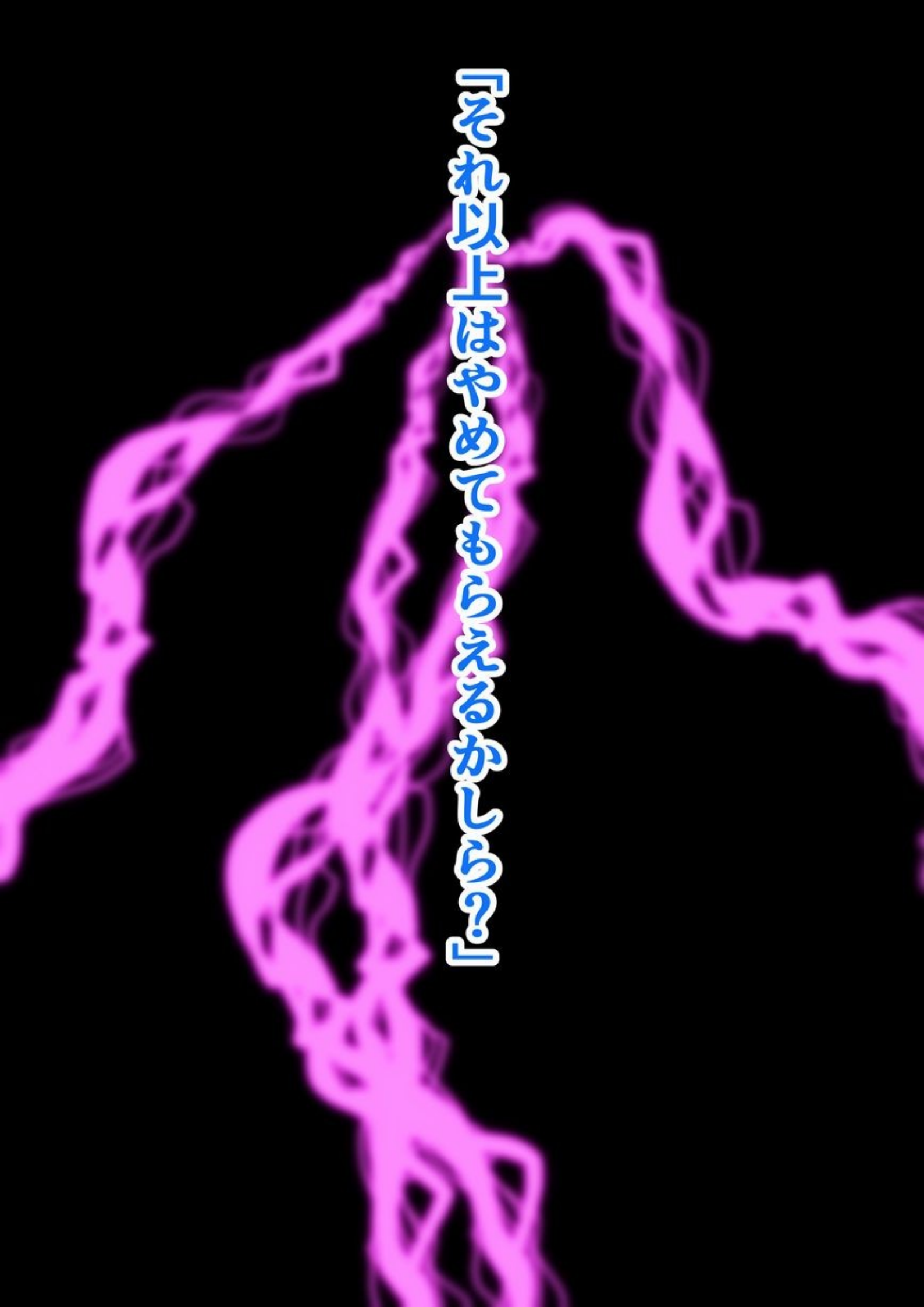
扉自体が消滅していた。しかも通信も遮断されるというおまけ付きである。

「多分こういう仕掛けが出来るってことは、奥に上級マールゴがいるよね。」

上級マールゴとは下級マールゴがエネルギーを喰らい続け成長する事によって生まれ出る個体で、強力な特殊能力を持つものが多くマールゴハンターにとっても油断する事の出来ない強敵である。

「多分そいつを倒せば出られるだろうけど…、よし！ 気合入れていく…。」





『それ以上はやめてもらえるかしら?』







「んっ…んっ…」

「ふっっっどうかしら？、私の拘束術は？」

[illegible][illegible]

残念、そう簡単に解ける程ヤワな術じゃないのよ!

ふんっ! ふんっ! ふんっ!...くっ...そ...!

「っあー、やめろ、なんで、こんな…」

「ん？なんで腋なんかつて事？んふふ。
アナタ、ここが弱いんでしょう？」

「そんな…こと、んあ！♡」



「そんな…ごど、んあう!♡」

「ほら、こんなに敏感、それに美味しいエネルギー!。まあ、私はそっちには必要以上の興味はないのだけれど…」

どっちにしても下ごしらえは大事よね。さあ、気持ちよくしてあげるから、早く素直になつて私にアナタの美味しいものを頂戴。」



「…誰…が、あつはな、せ…くっ♡うっ…」

「念入りにやったつもりだったけど、アナタって随分強いよね。このままじゃ、本当に拘束を破りそうね。」

「ふふっ、それは困るからアナタにはもっと気持ちいい事に素直になってもらおうかしら？」



「……んくう……あ……」

「ふふふ……どうかしら？、頭の中が気持ちよくて何も考えられないでしょ？
さっきも同じ事をしたんだけれど、これをやってる最中は記憶なども消えちゃうのよね。
思考を読み取る副作用かしらね？
だからアナタにとってでは訳も分からず捕まっただよりに感じたでしょうけど
そんな事なかったのよ？……あら？」



『…うあ…く…う…う…こんな…もの…く…う…』

『そんなに抗えるの？
流石だわ。』

でも面白い事が読み取れたわよ、
アナタ、快感に弱い体なのに我慢してたみたいだけど
かなりギリギリだったのね。
じゃあ、もつともつと気持ちよくなれるようにしてあげる。」





「あ……あう、あ………」



ひやいや
めやつあ、
あああ……
♡♡♡
ふああ、
んあ♡♡

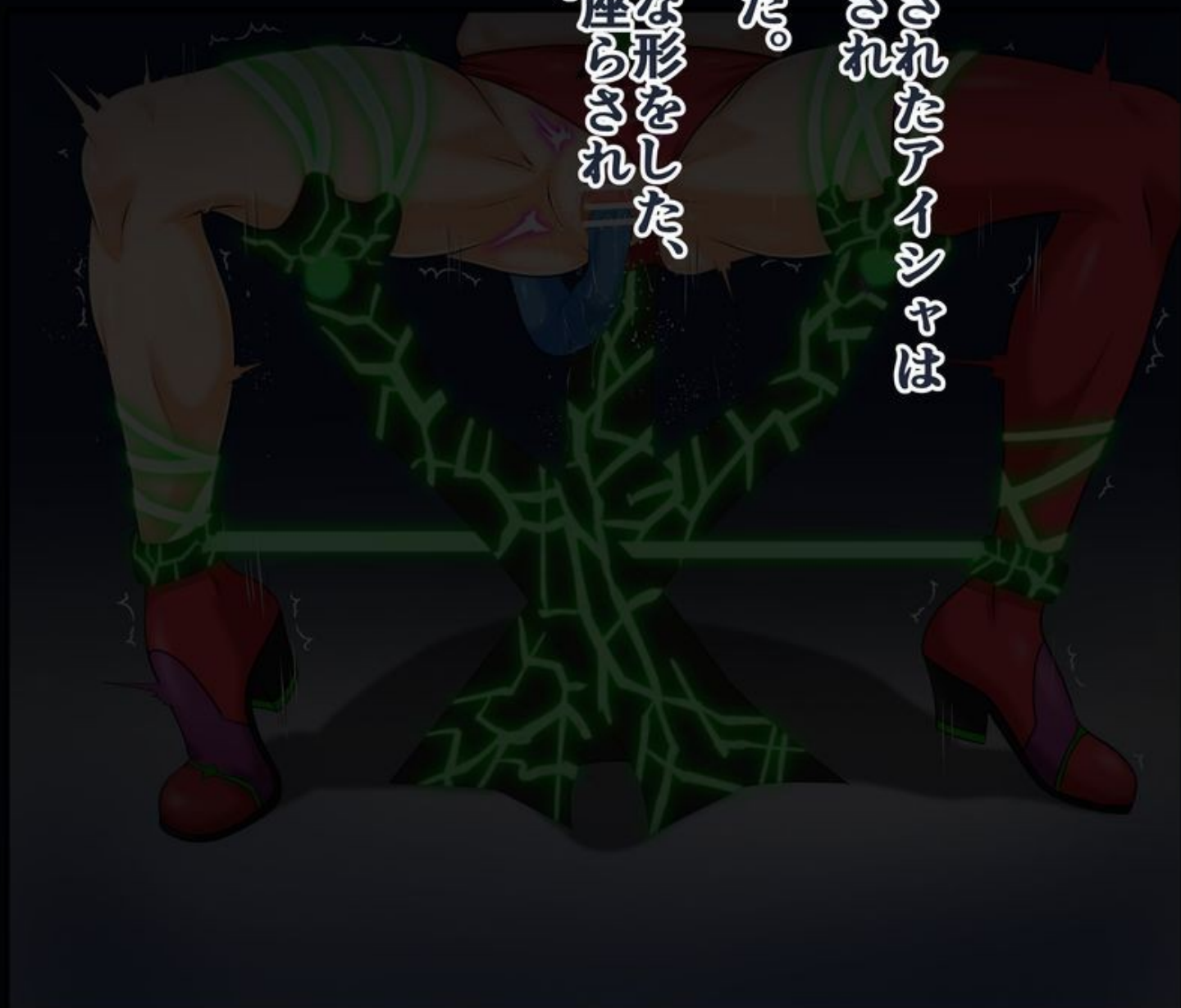
「うん、食材がいいと器が簡素でも食んはなに素晴らしく仕上がるのね」

でも今日は食事するつもりがなかったから、
術で作った簡単な器しかなくてごめんなさいね。」



シエニヤの精神攻撃に翻弄されたアイシヤは
何度も強烈な絶頂を味わわされ
無力化された後、
シエニヤの自室に連行された。

そこでアイシヤは椅子の様な形をした、
シエニヤの言う所の器に座らされた。
肢体を弄ばされていた――



「あら〜？もう降参しちゃうの？」

「さっきまであんなに勇ましかったじゃない？
ま〜でも仕方ないわよね〜」

「!!!!んっ♡♡♡♡♡おっおお……んぐううー♡♡♡♡♡」

「初めてのマインドドレイン体験、
如何かしら？」

「まあ経験してたって対策できる人なんて
滅多にいないんだけれどね。」



マインドドレイン

それはごく一部のマーゴにみられる特殊な嗜好で、人間の精神エネルギー（力）を喰らう行為である。

本来生物のエネルギーを栄養としているマーゴにとって精神エネルギーの価値はほとんど無い。

しかもこのエネルギーは人間にのみ存在するもので、更にそれを味として認識できるマーゴもごく少数といわれている。

「……♡はっ♡♡♡あ……あ……♡♡」



「う……あたまで、すわれると
……きもち……よすぎ……て……」

「やでやで」

「……すぐに、いっちゃって
……おいて、こられぬ……の……」

「頭からだけじゃあ……ないでしょ？
もっと気持ちいい吸い方もあったでしょ？
どこどこから同時に吸われるのが一番よかった？」



「シエニヤ様!!」

「……あら?何かしら?」

入ってきたのはシエニヤの部下マーゴだった。

「外にいるマーゴハンターがシエニヤ様の結界を破壊し始めました、」

「?、そんなわけないじゃない、私の結界は中に入ったら位置や方向の感覚が狂うのよ?だから結界の核も分からず彷徨い続けるようになってるのよ。」

「それが、マーゴハンターの1人に飛行能力を持つ者がおり、その者が上空の結界の範囲外から攻撃し、内部に侵入した者と一緒に攻撃することで核が崩壊しはじめており、もう限界です!、後5分もすればここにも奴らがやってきます!」

と、切迫した様子で部下マーゴが現在の状況を報告する。

「ふん、成程ね、そういう手があるのかあ、まあクラス5のお仲間ですものね、1時間くらいで私の結界をねえ……やるわね。」

……ところであなた?」

「はい、」支持……を、つつ……ぐ……え……」

何かを潰したような音がしたかと思うと、
シエニヤの触手が部下マーゴの肩から侵入し
胸のコア部分を抉り抜いていた。





「如何なる理由であつても私の食事中は部屋の扉を開けてはならない、そう教育したはずだけど？」

そう忠告した所で絶命した部下が動くことも返事をする事も無い。死体を放ったシエニヤはため息を吐き。

「はあ、まったく…、次はもうちよつとマシな部下を作らないとね、ロイヤルガードみたいなのもいいわねさて。」

シエニヤは部屋にあるボタンを押す、すると先程とは違う下級マーゴが部屋にやってくる。

「シエニヤ様、どうされましたか？」

「今マーゴハンターが侵入してるのよね。」

「はい、結界は崩壊し、防衛しております。」

「そう……じゃあ、私が逃げる時間を稼ぐ為に、全員で死んできて頂戴。」

「え？、それはどういう……」

理不尽な命令に困惑する部下マーゴがシエニヤの方を見ると、シエニヤの頭部の装飾が開き、アイシヤすら陥落させた光が明滅する。

「あなたがリーダー、

とにかく全員で戦って全員で死んできなさい、
マーゴハンターに情報を渡したくないから一人も生き残らないで、
逃げ出す奴は貴方が殺しなさい、

出来ればあなたが生き残って最後に自害するのがいいわね。」

そう言うときエニヤの頭部の明滅のパターンが変わる、
すると程無くしてと部下マーゴの体が膨れ上がる、
その体は筋骨隆々で
形状も明らかに正常な状態ではない位歪だった。

「これは私からプレゼンよ、

限界まであなたの体を強化したわ、長く持たないけど、
頑張つて仕事を全うしてきてね。」

「…はい…カシゴマリ…しました…。」

そう言うって強化された部下マーゴは部屋を出ていった。

「さて、これで10分くらいは持つかしらね、

まあ今回は滅多に味わえない精神力を食べられたから良しとしましょう。

エネルギーも結構確保したから

今度は前よりも質のいい部下を揃えられそうだしね。」

「アイシャ、

貴方は最高に美味しいマーゴハンターだったわよ
機会があつたらまた味わわせて頂戴。

それじゃあね」

別れを回にしながら絡めた触手を解こうとし、

。。。エニヤの動きが止まる。

「……最後にもうちよつとだけ♡」



「♡♡♡んへえ…おほお…♡♡♡
お…ん♡お…あ…!!♡♡♡♡♡♡♡」

